

## アルコール依存症者と糖尿病患者の語りの比較 —愛の物語の再構築—

塩谷育子\* 橋本佐由理\* 宗像恒次\*

### Comparing Narratives of Alcoholics and Diabetics : Remaking Narratives of Love

\*Ikuko Shiotani, \*Sayuri Hashimoto, \*Tsunetsugu Munakata

\*Graduate School of Comprehensive Human Sciences

University of Tsukuba

#### *Purpose*

- (1) To compare and analyze self-image-scripts that characterize stress behavior of alcoholics and diabetics, based on the SAT health counseling theory.
- (2) To qualitatively examine the effectiveness of SAT image therapy in changing the meaning of sickness by changing negative image-scripts into positive ones.

#### *Method*

##### *Participants*

Alcoholics (n=40 ; 36 males and 4 females), 26 diabetics (6 males and 11 females).

##### *Procedure*

Non-parametric statistical analysis (Mann-Whitney U test) was conducted on quantitative data. A case study was also done. Triangulation was undertaken in which the qualitative data from the case study was analyzed together with the quantitative data.

##### *Results*

Results indicated no significant differences between the two groups related to the perception of emotional support, problem-solving behavior, or in the difficulty of perceiving feelings. Alcoholics however, had more self-image-scripts that characterized stress behavior, they tended to feel more stress related to daily events, and they had stronger trait anxiety than diabetics. Results of quantitatively analyzing SAT therapy indicated : (1) Interior-of-the-womb and bringing-up-children-again-as-parents imaging methods were effective in changing the image-scripts in a positive direction, in helping patients recognize the love of others, in helping them develop dependency on others, and in facilitating help seeking behavior : (2) The changes in

---

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

self-image-scripts resulting from SAT therapy satisfied the wish and need for love and increased self-confidence, which helped patients to identify their own needs and to assert themselves : (3) Self-in-the-future imaging technique improved self-image-scripts of the future and helped patients to find satisfying interests.

#### Conclusion

It is suggested that positively changing self-image-scripts is an effective approach for changing the meaning of sickness and remaking the self-narrative of life. experiences, such as death or loss. In such a case, individuals who lose a significant person in their lives may experience a sense of empowerment through the construction of narrative generativity, by which confidence and optimism with respect to continuing life cycles from one generation to the next generation are generated.

#### キーワード

イメージスクリプト image-scripts

心の本質的欲求 essential needs of soul

SAT療法 SAT therapy

愛の物語の再構築 remaking their narratives of love

## I. はじめに

先進国では、アルコール総消費量の減少がみられるにもかかわらず、わが国ではいまだ増加傾向を示しており、230万～250万人の大量飲酒者がみられる<sup>1)</sup>。1987年の調査では、治療費として直接支払われた額は約1兆1,700億円にのぼるとみられる<sup>2)</sup>。「健康日本21」<sup>3)</sup>では、アルコールに関する3つの主要な努力目標が設定されたが、いまだ確実に有効な治療方法が確立できていないのが現状である。

一方、糖尿病は、平成15年8月に「平成14年糖尿病実態調査報告」が厚生労働省より発表された前回の調査に比べ、「糖尿病が強く疑われる人」が約740万人、「糖尿病の可能性が否定できない人」を合わせると約1,620万人と増加傾向にあることが報告されている。糖尿病の医療費は平成12年度で1兆1,155億円に及んでいる<sup>4)</sup>。

アルコール依存症と糖尿病は莫大な医療費を消費し、深刻な問題であり、国をあげての取り組むべき最大の問題となっている。しかし、どちらも効果的な対策がなく、

増加の一途を辿っており、新たな発想に基づく取り組みが必要であると思われる。アルコール依存症者は、糖尿病患者と異なり、反社会的逸脱行動をし、一見行動パターンの異なる人々であるが、根底では、どちらも自分の本音を抑え、周りに自分の本当の気持ちや思いは伝えられないノンアサーティブな行動パターンは似ている。それぞれ自己抑制するが、一方が過剰適応、他方が不適応する形をとっている。両者に対する物語性とエビデンス性の両面を踏まえた統合的アプローチ法の検討が必要であると考ええる。

医療人類学や医療社会学、健康心理学における病気 (illness) という時は、生物学的状態としての疾患 (disease) とは異なり、むしろ心身の調子の悪さによって平常な心理社会的な行動ができなくなったことによって生じた社会逸脱的な状態を指すとみなされている<sup>5)</sup>。病いのナラティブは、その患者が語り、重要他者が語り直すストーリーであり、語ることによって、病いをめぐる様々な出来事や経験や意味が整理され、1つの物語が構成される。宗像<sup>6)</sup>は、「人は、一つには家族や仲間などの自分を支える身近な人とのかかわりの中で愛され愛することで生きる意味を感じる」と述べている。病いなどの体験は、自分を作り出してきた過去の人や環境の隠れた未解決な課題に気づかせ、自分らしく生きるチャンスや、自分の人生の意味を知らせてくれる。

宗像<sup>7)</sup>は、人は物事を捉える時、その情報不足分を過去の経験や知識から「～ときは、～こうなる」という期待 (予測) のイメージスクリプトに基づいて認知するというイメージスクリプト概念を提唱している。自己や他者を捉える時もイメージスクリプトによってイメージ構成され、過去の経験からの期待に合致するように自己や他者を再構成する傾向にあると述べている。

本研究では、SATヘルスカウンセリング理論に基づいて、アルコール依存症者と糖尿病患者の行動特性と語りを比較し、また、SATカウンセリング法およびSATイメージ療法による介入を実施し、病いを通して、ポジティブな自己イメージの素材を見出すことにより、病いの意味変換をし、自らの人生物語を再構築していくか否かを検討することを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象及び面接方法

#### 1) アルコール依存症者

対象は、兵庫県内A病院のアルコール依存症の患者40名とした。調査票は、本人の同意を得た上で調査票を配布し、記入してもらった。不明な点について、後日面接し聞き取りをした。調査期間は、平成16年4月から同年11月までとした。

カウンセリングによる個別介入は、調査票結果を渡す際に、面接の趣旨を説明し、同意を得られた者に対して、院内にて行った。面接は、個室の確保をし、ヘルスカウンセリング学会公認心理カウンセラーの資格をもち、アルコール依存症治療の臨床経験5年の者が、1対1で面接した(表1-1)。

#### 2) 糖尿病患者

対象は、埼玉県内B町の糖尿病である町民に呼びかけをし、応対した20名とした。調査票は、介入者は声に出して読みあげ、相手も調査内容が見えるように聞き取りした。また神奈川県内C医院の糖尿病患者6名についても同様の調査を行った。調査期間は平成15年8月から平成16年12月までとした。

カウンセリングによる個別介入は、B町保健センターにて行った。面接は、個室の確保をし、ヘルスカウンセリング学会公認ヘルスカウンセラーの資格をもち、カウンセリングの臨床経験のある者が、1対1で面接した。さらに、内容を録音することを申し出、会話をすべて、テープに録音した。録音の不都合がある場合は、断つてもよい旨を告げたが、拒否した者はいなかった(表1-2)。

表1-1 アルコール依存症者に対する調査実施のフローチャート

①9月14日	調査票記入	
②10月6日	調査票結果説明	
③10月12日	講義用資料説明	
④10月19日	カウンセリング実施①	← 1回目
⑤11月2日	カウンセリング実施②	← 2回目
⑥11月24日	カウンセリング実施③	← 3回目

表1-2 糖尿病患者に対する講座実施のフローチャート

① 7月2日	教室の説明および医師の講話	
② 7月12日	聞き取り調査	
③ 7月20日	講座（心と身体）	
④ 7月26日	カウンセリング実施①	← 1回目
⑤ 9月16日	講座（アサーション）	
⑥ 11月29日	カウンセリング実施②	← 2回目
⑦ 12月17日	カウンセリング実施③	← 3回目

## 2. 調査内容

アルコール依存症者は、1) 属性、2) 日常苛立ち事尺度（宗像1997：20項目）、3) 情緒的支援ネットワーク尺度（宗像1996：10項目）、4) 自己価値感尺度（Rosenberg, 宗像1987：10項目）、5) 対人依存型行動特性尺度（Hirschfeld 1977, マクドナルド・スコット訳1987：18項目）、6) 自己抑制型行動特性尺度（宗像1990：10項目）、7) 感情認知困難度尺度（宗像2000：10項目）、8) 問題解決型行動特性尺度（宗像1990：10項目）、9) 特性不安尺度（Spielberger, 水口ら訳1970：20項目）、10) 父のイメージ（我慢強い、やさしいなど13項目）及び成育背景、11) 母のイメージ（父のイメージと同じ）および成育背景、を調査した。

糖尿病患者は、上記の項目に加えて、12) 嬉しかったこと、13) 悲しかった、14) 自己イメージ、を調査した。

## 3. 介入方法

面接法はSATヘルスカウンセリング理論に基づいた構造化連想法（Structured Association Technique）<sup>8)</sup>を採用した。SATは、構造化された方法で右脳を活用し、隠れた本当の感情に気づき、その感情の意味を左脳思考し、問題に気づくことを助けるものである。また、海馬に基づく3歳以降のエピソード記憶に基づく未解決な心傷体験を心の本質的欲求（無条件に人から愛されたい慈愛願望欲求、自らを愛したい自己信頼欲求、人を愛したい慈愛欲求）の充足によって解決したイメージに変更することで、過去の再学習を促すSATカウンセリング法と大脳扁桃体による潜在記憶に基づ

く出産期・胎生期の感覚イメージや前世代の伝達イメージからの過去の再学習を促すSATイメージ療法の2つがあり、この両者を採用した<sup>9)</sup>。

アルコール依存症者はSATカウンセリング法のうち、未来自己イメージ法<sup>10)</sup>、心傷風景連想法<sup>11)</sup>を行い、SATイメージ療法のうち親の再養育イメージ法<sup>12)</sup>を行った。

糖尿病患者はSATカウンセリング法のうち、自己イメージ連想法<sup>13)</sup>を行い、SATイメージ療法のうち、胎内イメージ法<sup>14)</sup>、親の再養育イメージ法<sup>12)</sup>、地球イメージ法<sup>15)</sup>を行った。

SATカウンセリング法およびSATイメージ療法を施行する際、SATカウンセリングの感情に関するガイドライン表を使用した。

#### 4. 分析方法

量的分析として、アルコール依存症者と糖尿病患者を比較するために、ノンパラメトリック検定のMann-WhitneyのU検定を行った。

質的分析として、アルコール依存症者と糖尿病患者の事例分析を行った。得られた結果がその事例内で一貫していること（内部一貫性、信頼性）の検討をし、既存の知識との適合性に照らし、現実的な問題解決への寄与など、事例分析の妥当性を確かめ、さらに、これら事例データと量的データを重ね合わせて検討を行うトライアングレーションを行い、分析の妥当性の追及を行った。

### III. 結果と考察

#### 1. アルコール依存症群と糖尿病群の各要因の比較

結果を表2に示した。

#### 2. アルコール依存症者と糖尿病患者のメンタルヘルスとストレス行動特性の比較の考察

アルコール依存症者は30代～50代が多く、糖尿病患者は60代が最も多く、対象に年齢差があった。これは、性別、年齢別飲酒習慣者は、全体に30代～50代の男性が多く、女性は10%に満たない<sup>16)</sup>。アルコール依存症治療のために入院している患者を対象

表2 各要因のアルコール依存症群と糖尿病群の比較

要因	アルコール 依存症群 (n=40)	糖尿病群 (n=26)	P 値
平均年齢	49.6	61.7	***
日常苛立ち事	15.2	7.2	***
自己価値感	5.0	6.7	**
対人依存型行動特性	5.1	3.9	†
自己抑制型行動特性	10.5	9.2	*
特性不安	51.0	40.2	***
情緒支援 (家族)	6.5	7.8	n.s.
情緒支援 (家族以外)	6.4	5.5	n.s.
感情認知困難度	8.5	7.8	n.s.
問題解決型行動特性	9.5	9.5	n.s.

としたため、30代～50代が多くなった。糖尿病患者の特に2型糖尿病は多く中年以後に発症する。わが国では高齢化が進行しており、高齢者有病率は約15%、全糖尿病患者の4割近くを高齢者が占めつつある<sup>17)</sup>。このような状況から、必然的に高齢者の割合が高くなったと考えられる。

日常苛立ち事、対人依存型行動特性、自己抑制型行動特性、特性不安は、アルコール依存症の方が糖尿病患者より有意に高く、自己価値感は低かった。アルコール依存症者の環境は、飲酒に関わる職場内のトラブルや暴力・障害・殺人などの各種犯罪や交通事故などを起こしており、就職や家庭など様々な日常の問題を抱えている人が多い。先行研究<sup>18)</sup>で、小児期に心傷体験を多く体験しているほど心的外傷反応を起こしやすくなり、心的外傷反応を起こしやすさとストレス性の高い行動特性の相関があると述べている。アルコール依存症者は、成育背景において愛情のない家庭環境<sup>19)</sup>にあり、心的外傷を多く受けているため、対人依存型行動特性、自己抑制型行動特性が高いうえに、日常苛立ち事も多く、ゆえに特性不安も高いと考えられる。先行研究<sup>20)</sup>に述べられているように、親の過保護傾向や過干渉な養育態度が自己肯定感の欠如の要因の1つであり、また、職を失い、家族に迷惑をかけ、事故や反社会的行動をしていることもさらに、自己価値感を低下させていると考えられる。

情緒支援認知、感情認知困難度、問題解決型行動特性は、両者に有意差がなかった。アルコール依存症者は、成育背景に両親の離婚や親のアルコール問題などがあり、安

心で安全な養育環境でなく、周りに甘えたり、助けを求めたりできる状況ではなかったと考えられる。一方、糖尿病患者は、成育背景が両親や祖父母が頑固で厳しいが、親から期待に応えるために行動せざるを得なかった背景がある。一見、周りとうまく折り合いをつけて行動し、信頼もあるが、本音を語れないために、情緒支援認知が得られていないと考えられ、差がなかったと考えられる。

アルコール依存症も糖尿病もストレス関連疾患といえ、感情認知困難度が高い人が多かった。感情認知困難は心的外傷後ストレス症候群である<sup>21)</sup>ことから、両者には差がなかったものと考えられる。また、アルコール依存症者は、ストレス性の高い行動特性、低い自己価値感や情緒的支援認知、さらに感情認知困難度が高いことから、問題を現実的に対処する問題解決型行動特性は低いと考えられる。糖尿病患者はアルコール依存症者に比べ、相対的にストレス性の高い行動特性は低く、自己価値感が高いが、周りの期待に応えるための行動をとるため、積極的かつ現実的に対処する問題解決型行動特性は同様に低いと考えられる。よって、両者に差はなかったと考えられる。

### 3. アルコール依存症者事例（40代男性A氏）

本事例は、調査票に記入してもらったのちに、親の再養育イメージ法、未来自己イメージ法、癒し技法を行った。面接は3回実施した（表3）。介入結果は図1に示す。

本事例は、人を信じることができず、周りに相談できないというネガティブな自己イメージスクリプトをもっていた。介入後、自分の思いを言ってよいと気づき、自分

表3 心理調査項目の結果推移

項目	①介入前	②1回目	③2回目
日常苛立ち事	16	19	17
情緒支援家族	10	10	10
情緒支援家族以外	10	10	9
自己価値感	4	4	4
対人依存型行動特性	3	3	3
自己抑制型行動特性	10	12	11
感情認知困難	8	11	13
問題解決型行動特性	14	15	12
特性不安	46	43	45



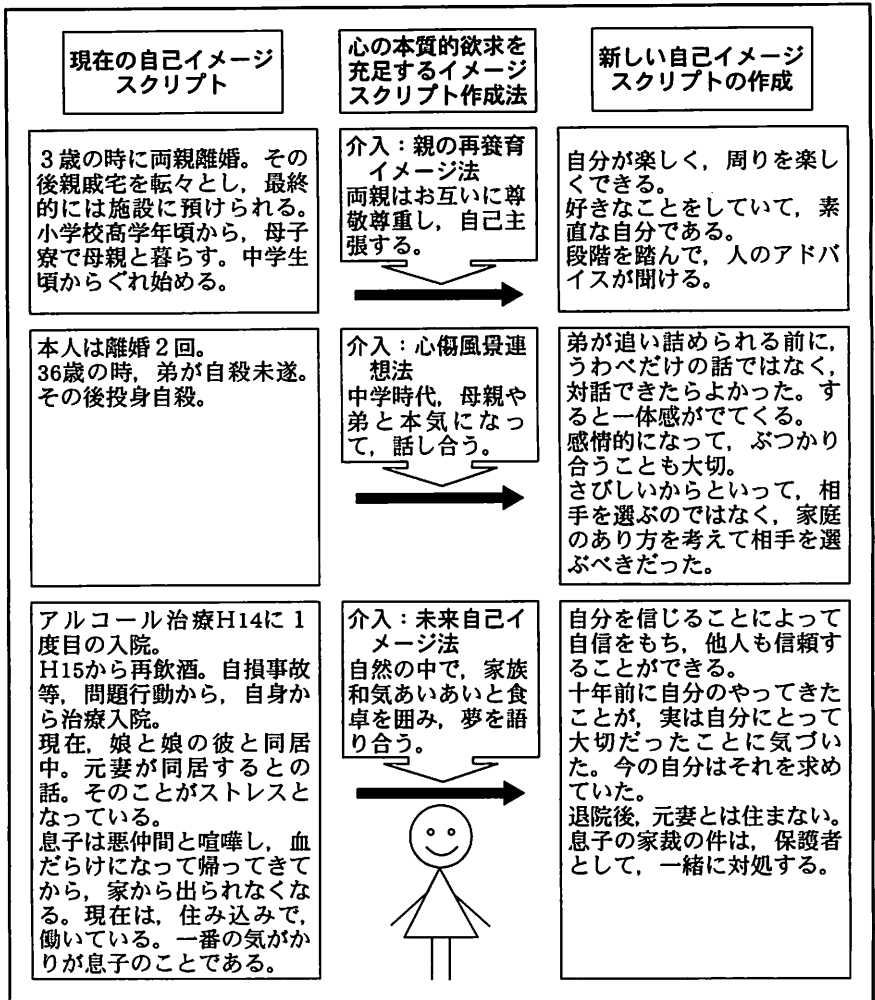


図1 アルコール依存症者事例(40代男性A氏)

の本音を伝え、周りに相談していくというポジティブな自己イメージスクリプトに変容した。

祖父母、曾祖父母の代まで遡り、理想的な祖父母、曾祖父母から育ってきた両親イメージスクリプトを作り、その両親から無条件に愛されて育つ自己イメージスクリプトを作る親の再養育イメージ法を実施した。無条件に愛されているイメージスクリプト

トをもつことで、自分が本当はどのように生きたいのかに気づくことができると考えられる。

心傷体験の、その後起こる被害を食い止められる時間まで遡り、癒し技法を行う被害回避イメージ法を実施した。心の本質的欲求を充足したイメージスクリプトを作ると癒され、過去のこだわりから解き放たれ、と同時にその過去の未解決な問題の解釈から現在抱えている本当の問題に気づいていった。

未来イメージスクリプトを映像のように作り出し、ポジティブな自己イメージスクリプトから、現在の自己をみることで、本当の自分の要求を明確にできる未来自己イメージ法を実施した。自分が大切にしたいことが明確になり、自分自身を満足させることをしていくことが重要であることを認識できたと考えられる。

介入実施後、入院中に元妻が自分の家に引越してきたことを、本当は自分一人でやっていきたいことを伝えると自己決定し行動した。これまでの生き方は、自分がどう思うかよりも、周りの思いを優先していたが、自分自身も相手も大切にするために自己主張するという行動に変わっていた。

小さい時から、親戚中を転々とした寂しい思いを理解してくれるのは弟だけだったと語り、その弟が自殺をしたということが受け入れがたい事実で、それを忘れさせてくれるのがお酒であったと本人は語った。調査票項目の推移は、対人依存型行動特性は低下したものの、自己抑制型行動特性や感情認知困難度は上昇し、悪化した。現実問題は直視したものの、本当に心から甘えられるという実感はもてていないため、さらに、自分でがんばるしかないという結果になったと考えられる。スキンシップ不足から安心で安全な体験が足りないためと考えられる。

アルコール依存症者は、親の離婚や無愛情の家庭などの成育背景<sup>19)</sup>から、人を信じることができず、本音で周りに相談できず、いつも恐怖感のなかにいるため、アルコールがそれを忘れさせてくれるという自己イメージスクリプトをもっている。介入後、愛されているということを認知し、自分の気持ちを素直に表現していくこと、毎日を平穏に過ごすことが大切であることに気づき、そして、周りへ相談していこうという新しい自己イメージスクリプトを作ったと考えられる。

#### 4. 糖尿病患者事例（70代男性B氏）

本事例は、心理特性調査、親イメージ、嬉しかったこと、悲しかったことを聞き取り調査した。自己イメージ連想法、胎内イメージ法、親の再養育イメージ法、地球イ

メージ法を行った。個別面接は3回実施した(表4)。介入結果は図2に示す。

本事例は、贅沢や甘えることは無理なこととあきらめているネガティブな自己イメージスクリプトをもっていた。介入後、そのままの自分を肯定し、自分や他者を信じ、周りと相談していくというポジティブな自己イメージスクリプトに変容した。スキンシップ法により、各項目改善している。

胎内イメージ法や親や3世代遡及しての再養育イメージ法を実施した。親の世代は戦争という、環境の喪失体験があり、時代背景からぜいたくや甘えることは所詮無理なこととあきらめているところがある。祖父母の代から親の代が十分に甘えられ、愛されたイメージを作り、甘えることができた親から、自分も甘え、おぶってもらうという慈愛信号を発するスキンシップで、慈愛願望欲求が満たされた。安心して甘えられ、本当の愛を体験したことで、ありのままの自分でよいと自分を肯定的に捉えられ、自分の本当にしたいことをやってもよいと気づく。親の愛を感じたとき、自分殺しをやめ、自分を大切にすることが重要であることに気づいた。また、1人で決めてしまうのではなく、周りとよく話し合っていくと自己決定している。

先行研究<sup>22)</sup>でも効果が得られているが、ポジティブイメージスクリプトをつくることで、未解決感情と要求に気づき、自分を大切に生き方に気づくことで、対人依存型行動特性、自己抑制型行動特性、感情認知困難度の低下、情緒支援認知、問題解決型行動特性の上昇の改善がみられ、特性不安は低下している。

表4 心理調査項目の結果推移

項目	①介入前	②1回目	③2回目
日常苛立ち事	5	—	—
情緒支援家族	8	10	10
情緒支援家族以外	2	8	10
自己価値感	8	10	8
対人依存型行動特性	3	2	1
自己抑制型行動特性	3	8	2
感情認知困難	7	7	5
解決型行動特性	9	11	10
特性不安	48	33	24



図2 糖尿病患者事例 (70代男性B氏)

糖尿病患者は、無条件のゆるぎのない愛がないことに気づかず、甘えないことがあたりまえだと思っている。周りのために無理をしてでもがんばり、それが、結果的に、糖尿病や他の慢性疾患を引き起こしていたと考えられる。介入後、甘える体験や本当の愛を体験し、今の自分を肯定し、自分や他者を信じ、周りとは相談していこうという新しい自己イメージスクリプトを作ったと考えられる。

## IV. 結論

本研究は、SATヘルスカウンセリング理論に基づいて、アルコール依存症と糖尿病のストレスになりやすい行動特性を比較し、それぞれの成育背景や心傷体験から病いの意味を探っていくことを目的とした。

量的データからアルコール依存症と糖尿病の行動特性を比較分析し、質的データとしてアルコール依存症と糖尿病の事例分析から、次の暫定的な結論を得た。

- ① 日常苛立ち事、特性不安はアルコール依存症者が糖尿病患者より有意に高かった。
- ② 自己抑制型行動特性、対人依存型行動特性はアルコール依存症が糖尿病患者より有意に高く、自己価値感には有意に低かった。
- ③ 情緒支援認知、問題解決型行動特性、感情認知困難度は有意差を認めなかった。

以上のことから、アルコール依存症者と糖尿病患者は情緒支援認知、問題解決型行動特性、感情認知困難度において差がないにもかかわらず、アルコール依存症者の方がストレスになりやすい行動特性をもっており、よって、日常の出来事にストレスをもちやすく、特性不安も高くなりやすい傾向があることが示唆された。

次に、アルコール依存症者は、親の離婚、暴力など無愛情な成育背景から、存在意義が見出せず、アルコールだけが本音を話せ、辛い現実を忘れさせてくれると思っているものと考えられる。親の再養育イメージや心傷体験の癒し技法により、自分の要求に気づき、自己主張することが重要であることに気づき、また未来自己イメージ法により、自分にとって本当に大切なことは何か気づいた。そして、充たされない思いをアルコールで充たすのではなく、自分の本音を語ることや周りに相談していくことが重要であると気づいた。

糖尿病患者は、環境から、自分のしたいことができず、周りの期待に沿うことで、存在意義を見出し、自己価値感を高めていたが、本音が語れず、慢性的にストレスをためていると考えられる。胎内イメージ法や親や3世代前の再養育イメージ法により、両親が甘えられたイメージ及び本人が両親に甘えられたイメージをもったことで、ありのままの自分を大切にし、周りに本音を伝え、また、楽しみながら食事療法や運動療法をしていく見通しをたてた。よって、

- ① 胎内イメージ法や親の再養育イメージ法は、イメージスクリプトをポジティブなものにし、周りからの愛を認知し、甘えられ、助けを求めることを促す。
- ② 慈愛願望欲求や自己信頼欲求および慈愛欲求を充たす癒し技法による自己イメー

ジスプリクトの変更は、自分の要求の気づき、自己主張することを促す。

- ③ 未来自己イメージ法は、未来の自己イメージスクリプトを改善し、自分自身を満足するために楽しみ（趣味）をみつけることを促す。

以上のことから、ポジティブな自己イメージの素材を見出すことにより、病いの意味変換をし、自らの人生物語を再構築していくことが示唆され、アプローチ方法として、有効であることが示唆された。

## V. 今後の課題

本研究は、アルコール依存症と糖尿病の語りの比較を行った。両者を比較することによって、成育背景の違いからその病いの意味を明らかにした。

アルコール依存症と糖尿病のどちらの対象も年齢の偏りがあるため、さらに幅広い年齢層の調査が必要である。

アルコール依存症者は、入院患者のうち、今回の調査の趣旨を理解し、協力をしてくれた方に限られている。結果的に、自分自身の回復を願い、回復に向けて、前向きに取り組もうとしている積極的な行動をしようとしているものに限られた。糖尿病患者は、保健センターからの呼びかけに対して応じた町民であるため、限定された対象となっている。両群ともに、様々な背景をもつ人々への介入が必要である。

介入方法として、アルコール依存症は、慈愛願望欲求や自己信頼欲求及び慈愛欲求を充たす癒し技法や未来自己イメージ法を実施し、自分の本当の要求や自己主張していくことが重要であることに気づいていったが、成育背景に両親の離婚や暴力などがあると胎内イメージ法や親や3世代前の再養育イメージ法により両親が甘えられたイメージや本人が両親に甘えられたイメージをもつことが困難であった。アルコール依存症は親の無愛情があるので、カウンセラー側のスキルアップとともに地球イメージ法や宇宙イメージ法などによって人間以外に守護されることでポジティブなイメージの再構築をしていく必要がある。

本研究の糖尿病データは、平成16年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究B (課題番号：16300219；課題名：カウンセリング法による健康継続行動の遠隔支援システム開発に関する研究—地域住民の生活習慣病と患者および予備軍の支援のため—；研究代表者 橋本佐由理) により、行われた。

## 引用文献

- 1) 斉藤慈子：アルコールに関する疫学的・社会学的事項；概説的事項，日本臨床，55：503-510，1997
- 2) 高野健人，中村桂子：アルコール関連問題の社会学的費用，アルコール関連問題の現状－アルコール白書－（河野裕明&大谷藤郎編），179-191，厚健出版，東京，1993
- 3) 健康日本21企画検討委員会および計画策定検討会：21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）について報告書，厚生省，各論5：1-10，2000
- 4) 内村功：糖尿病実態調査にみる患者の動向と治療継続の意味，臨床栄養，104（2）：134-139，2004
- 5) 宗像恒次：最新行動科学からみた健康と病氣，86，メヂカルフレンド社，東京，1994
- 6) 宗像恒次：気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング，ヘルスカウンセリング学会年報，7：27-38，2001
- 7) 宗像恒次：ヘルスカウンセリング学会SOMセミナー資料，2004
- 8) 宗像恒次：新行動変容のヘルスカウンセリング，1-169，医療タイムズ社，東京，1997
- 9) 宗像恒次監修：カウンセリング医療と健康－ヘルスカウンセリングへの招待－，4，金子書房，東京，2004
- 10) 宗像恒次：ヘルスカウンセリング学会SOMセミナー資料，未来自己イメージ法，2004
- 11) 宗像恒次監修：カウンセリング医療と健康－ヘルスカウンセリングへの招待－，8-9，金子書房，東京，2004
- 12) 宗像恒次監修：ヘルスカウンセリング事典，70-71，日総研出版，名古屋，1999
- 13) 宗像恒次監修：カウンセリング医療と健康－ヘルスカウンセリングへの招待－，7-8，金子書房，東京，2004
- 14) 宗像恒次監修：カウンセリング医療と健康－ヘルスカウンセリングへの招待－，13-16，金子書房，東京，2004
- 15) 宗像恒次：気づき，癒し，行動変容へのカウンセリング，ヘルスカウンセリング学会年報，7：27-38，2001

- 16) 清水新二：アルコール関連問題の社会病理学的研究, 138-139, ミネルヴァ書房, 京都, 2003
- 17) 繁田幸男, 景山茂, 石井均編集：糖尿病診療事典第二版, 48, 医学書院, 東京, 2004
- 18) 奥富庸一, 宗像恒次：気づき, 癒し, 行動変容へのカウンセリング, ヘルスカウンセリング学会年報, 7 : 130-135, 2001
- 19) 秋山弘之：アルコール依存症の成因論 発生要因—性格因子, 環境因子—, 日本臨床, 55 (特別号) : 357-365, 1997
- 20) 松下年子, 田口真喜子, 山崎茂樹：アルコール依存症者における心理特性と親の養育態度, 精神医学, 44 (6) : 659-666, 2002
- 21) 宗像恒次監修：カウンセリング医療と健康—ヘルスカウンセリングへの招待—, 10-11, 金子書房, 東京, 2004
- 22) 樋口倫子, 宗像恒次：気づき, 癒し, 行動変容へのカウンセリング, ヘルスカウンセリング学会年報, 8 : 37-45, 2002